点から線から面へ

K.T

「大地」に参加した当時、孫娘は幼稚園年長から不登園、小学校も３日登校しただけで、1 年間不登校が続き、見通しもない手詰まり状態でした。

不登園以来、園も学校も母親にそれなりの対応をしてくれましたが、孫娘は関係者には頑として会わず、母親は外部からの働きかけが苦痛になり、私からの介入もされたくないという態度でした。

私はこのままではいけないと実情を訴えたり、相談のため最初は母親に内緒で園や学校にも行きましたが、親を飛び越えての対応はできないとのこと。 子育て支援センター、複数の心療内科、大学の研究所、府の家庭支援センター等、関係機関に個別で相談。その間東京在住の父親には状況を報告、彼は月に一度は娘に会うために我が家に来ていました。家庭支援センターが父親に接触、やっと家族で相談出来るようになったのが一年半経過してからでした。その後は両親と孫娘に対して保健所で家庭支援センターの担当者との面談が月に一回程度あり、その経過で、心療内科での母子の診断を薦められ、病院へも数回通いましたが、孫娘は各種検査や面談は全面拒否し続けました。

そんな行き詰まった時期に「大地」に参加。目の前がぱっと開けた感じがしました。これまでは個別対応ばかりで、次の相談所を紹介され、一から経過や実情を何回訴えても先は見えませんでした。けれど、「大地」での経験交流やアドバイス等で、やっと不登校の状況や課題がわかり、子どものあるがままを受け入れ、見守り、居心地のいい環境を用意していけば希望がもてると励まされました。

自分が自分で良いと思える場所

幸山 由佳

息子が不登校だった小学４年生から中学３年生の間。学校との連携はできており、小学生の間は息子の学習環境も友だちとの交流もまずまず。しかし中学生になると学習へ向かう意欲が低下。友だちも部活に打ち込み交流が減りました。同時に私も息子が不登校になった当初の頃のように不安を感じることが増えました。

息子のことを信じていても、不安の発作は潮の満ち引きのように押し寄せてくるものです。それからほどなくして立ち上がったのが大地。地域に不登校の子を持つ親の居場所はなかったので、互いの気持ちに真の意味で共感し、理解してもらえる場所が漸くできた！と思い、参加しました。

そこで自分の話を聴いてもらい、皆さんのお話を聴くにつれ、同じ事例はない、多様な人間を集団で育てる場所は、多様な価値観が必要なのでは、と感じるようになりました。大地は、場のリーダーもアドバイザーも参加者も同じ目線にいます。それは多様な気持ちを吐露するのにとても相応しいと感じます。

ご縁があり、息子もイベントに参加。子ども同士もつながり、その場で良い関係を作っているようです。子どもが成長しても、親子共にここにいつでも帰ってきて良いのだ、と思える場所です。

向日市物集女 りんごの花

不登校が私の人生の課題と向き合うきっかけをくれた

H.N

漢方薬をこの夏からまた服用している。更年期のイライラ、気分の落ち込み、体調不良などが、少しでも緩和できればラッキーだ、というくらいのものであるが。とにかく私という人間は、精神状態の起伏が激しい。それが、長年の悩みであったし、周りの人達に及ぼす影響は、決して小さくないと思う。特に我が子には…。

大地の会に参加させてもらったのは、子どもが小５の秋に不登校になってから一年と少し経った頃だった。覚えているのは、「(自分の) 母がしんどい」と号泣したこと。不登校の悩みを話す場で、まさか母親との関係の苦しさを訴えるとは、思いも寄らぬことだった。「誰だって母親とはいろいろあるって」「みんなそうやで」などの言葉は、これまでかけられたことはあるが、何も否定されずに、ただありのままの私の言葉を大地の人達に受け止めてもらえたという経験は、私の心に大きな衝撃を与えた。

これまでの私は、気に入らないことがあると物を投げつけ、手を上げてきた父親には無論のこと、そんな父を止めるでもなく淡々とやり過ごす母親にも、自分の気持ちなど話したことがなかったためか (今は母がそうするしかなかったのだろうと理解しているが)、会に参加した始めの数回は、「あんなことを言うべきではなかったな…」という思いが、後からわいてくることも度々あったのだが、自分の感情を素直に出せること、受け止めてもらえることがだんだん嬉しくなっていった。そして、参加者の方々と交流を重ねるうちに、共感しあう大切さや、人は人に癒されるのだということをしみじみ感じ入るようになった私は、「学校に行けない自分は、なんてダメな人間なのか」と苦しむ我が子にも、少しずつ向き合えるようになっていったのである。

子どもが小さい時から、” 祖母 ” ではなく、” 母親 ” として干渉してきた私の母 (あるカウンセラーに、…あなたの子どもさんには２人の母親がいるんですね と言われたことがある) に、私は感謝しながらもどこか息苦しさを抱えて接していたのだが、「そんな生き方から脱却する」＝「自分の人生の課題と向き合う」きっかけを与えてくれた我が子よ！ーーーこの記念誌をあなたが読むことは…あるかどうか分からないが、きっとあなたにも出会いがある。それが、自分にとって大切なものであるかどうか、その時には判然としないかもしれぬ。それとわかるのに長い時間を必要とするやもしれぬ。でも、でもあきらめないでほしい。私も一緒にドタバタしながら、見守っていくつもりだから。

乗り越えられない試練はない

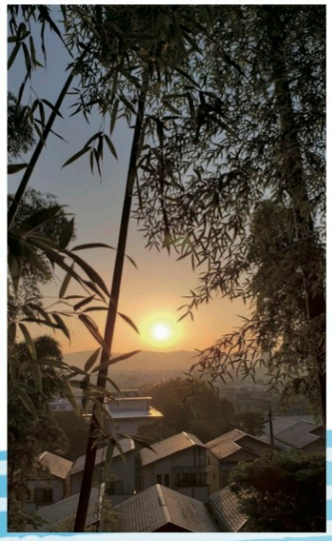
伊原 聡

私は不登校、引きこもりの経験者で、現在京都市内及びその周辺の親の会に支援者として参加させてもらっています。全然お役に立てていませんが、多くの方に受け入れてもらえていることが本当に有難く、感謝の思いでいっぱいです。

不登校、引きこもりは親のしつけや教育が間違っているからではなく、また本人の甘えやなまけから起こるものでもありません。誰でも体験する可能性があり、避けられないものです。

悪態や指図、暴言、暴力等様々な症状の対応がしんどくて、とても笑顔にはなれないと思いますが、これらの多くは決して本心ではなく、催眠術にかけられているような状態です。心も体も操られてコントロールできなくなっています。個人差はあるかもしれませんが、何とかしなければいけないという気持ちすら起こらず、ただ操られるままに行動するしかなかったというのが実感です。

ご両親が心配すればするほど、苦しめば苦しむほど事態は悪化するので、ご両親も居場所を見つけて、楽しみを見つけて、少しでも安心して暮らせるよう、また元気を取り戻せるようにしてほしいです。まずご両親の健康と命を大切にしてほしいと思います。



竹林からの朝日

兄弟の不登校

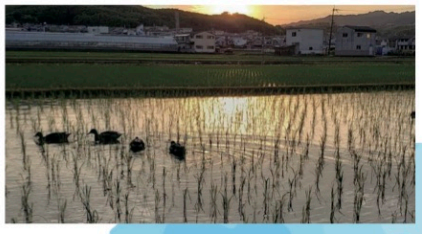
K.A

長男が行き渋りを始めたのは小５の秋。学校を休むことに強い罪悪感を抱いていた彼が、自宅で「もう自分はいなくなってしまいたい…」と静かに涙を流して言った姿を思い出すと、今も胸が締め付けられる。当時次男は保育園の年長さん。春には小学校に入学したが、兄と一緒に通うことはなかった。

そんな二人に私はそれぞれこんな言葉をかけていた。兄には「学校休んでもいいよ、大丈夫やで」。弟には「頑張って学校行って偉いなあ」。二人が揃う場所では言いにくい。弟の学校での話は、自宅ではなく帰宅する前に外で出迎え、マンションの階段の踊り場に腰掛けて聞くようにしていた。

しかしそんな弟も小３の終わりに行き渋りを始める。兄弟二人とも不登校になるのか？と大きな不安を抱えている時、地元の親の会「大地」に出会った。

同じ思いを抱え、でも明るく前向きなお母さん達と仲良く活動させてもらい、支えられて私は今に至る。月日は流れ子どもたちは通信制高校３年と中学１年。相変わらず２人とも家で過ごすことが多い現在である。優しくユーモアのある魅力的な男子たちである。学校へ行けなくても子どもは成長し、自分独自の道を見つけて歩んでいく。大地で私はそんな子ども達を目の当たりにさせてもらっている。我が子が不登校にならなければ今の私はない。自分も子も、あるがままでいい、ペースは人それぞれ、そう思える親に成長させてもらっている。



向日市物集女の田んぼ

道しるべの一つに

N.K

体調不良を理由に子どもが学校に行かなくなったのが 2017 年、小学校 4 年生の冬でした。明確な理由もわからず、学校に行かない、先生にも会わない子どもへの対応に行き詰っていた頃、9 月に開催された高垣先生の講演会に参加し「大地」を知りました。

しばらくして定例会に参加し、年齢や性別は違えど「不登校の子を持つ親」という共通項で集まった人々が、自身や子どもの近況や悩みごとを吐き出し、参加者が傾聴・共感し、不登校の子についての話題を存分に話すのを目の当たりにしました。周りに話せず視野が狭くなり不安ばかりだったのが、急速に和らいでいった感覚を覚えています。

毎回緊張しますが、話すことで心のモヤモヤが少し和らぎ、同じ悩みを持って話される内容は子どものこれからを考えるのに非常にためになり、道しるべの一つにもなっています。

参加して 3 年半、多少の波あれど劇的な変化は見られない我が子ですが、子どもなりのペースで成長しているのを感じています。そう思えるのも大地に参加して気持ちに少しゆとりができたからかな、と。そんな気持ちをもたらしてくれたこの会に感謝しています。

桂川

一緒に揺れつつ「元気な私」でいることを胸に刻んで

E.M

小５の夏休み、娘は外食に行く度に吐きました。初めは食べ過ぎ程度に思っていましたが、続くにつれて「変だな」と思い始めました。今思えばその頃の娘はいつも苛立っていて、私や弟に当たり散らしていました。　２学期に入り、朝に吐き気を催したり起きられなくなり、そして運動会を境に不登校に。小児科の発達外来を受診、起立性調節障害の検査を受けましたが違いました。生活リズムは崩さない方がいいと朝起こして一緒に朝食を食べ、私は仕事の昼休憩に娘の様子を見に帰っていました。娘はゲームをしたり、絵を描いたりお菓子を作ったりして過ごしていました。初めの頃は先生が様子を見に来てくれていましたが、娘が「連れて行こうとされるのが怖い」と言い、そのことを先生に伝えると、その後は週１で夕方に来て、勉強を教えてくれたりゲームをして帰るというふうになりました。私は学校に行かないことを理解しようとしながらも、『いつか行くかもしれない』という思いを持ちながら、せめて外出はして欲しいと好きな映画を見に行くなどはしました。

そうした中で『大地』に初めて参加。その場に座っただけで涙が出そうになり、自分が話す時にはボロボロ泣きました。周りに本当の意味で共感できる人や相談できる人がおらず、安心したのだと思います。それ以来、大地の保護者の方にたくさん助けられています。３学期、私塾をされている方と出会い、娘の居場所になればと思い行き始めたり、適応指導教室にも見学・体験を経て、今はコロナ不安で外出できませんが、行った日は楽しかったとほっこりできる場との出会いがありました。その娘は現在中２。中学に入学して、登校する日もありましたが、今は自分のペースで過ごしています。娘はよく「ママは『行かない』と言ったら悲しそうな顔をする」と言われます。私にしてみれば、前日準備しているのに、心中『え～』っと正直なります。今までのいくつかの体験（失敗）で学んだのは、親の気持ちを押しつけず、子どもが望んだことを実現する方が元気になれるということ。ある日「どうして欲しい？」と聞くと、「愛して欲しい。それからママが元気でいて欲しい」と言われました。今も不安だらけで喧嘩もするし先も見えないけど、私は自分の仕事を続けながら、娘と一緒に揺れつつ少しでも居心地のいい毎日が過ごせたらと思っています。

暗闇の中に光が見えて

T.O

不登校、それは突然のことでした。

中学１年のお盆明け、部活の行き渋りから始まり、始業式の日、何度起こしても起きず、お腹が痛いと休む。それが数日続き、2〜3 日に 1 回は登校できましたが、運動会の翌朝に行かないと言い切り、不登校生活が始まりました。

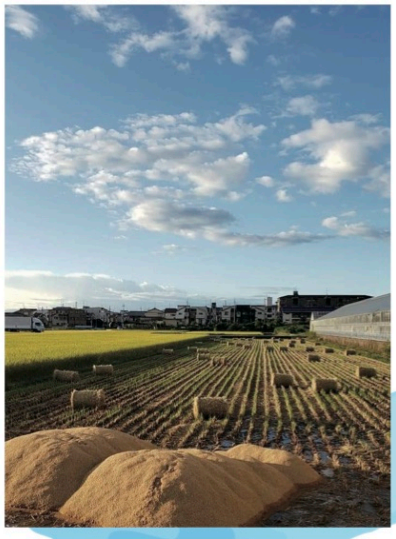
原因もわからず、ただただ日々だけが過ぎ 10 ヶ月ほどした頃、「大地」のフォーラムの案内を目にし、学校やスクールカウンセラーさんに聞いても出会えなかった、仲間のいる場所があることを知りました。

さっそく連絡し、定例会に参加しました。

今までの経緯や想いを聞いてもらって心が温かくなり、息子にとって今は充電期間なんだと教えていただき、暗闇の中に少し光が見えた気がしました。

それからは毎月定例会で泣いたり笑ったりすることが気持ちのリセット・リフレッシュとなり、日々息子と向き合うことができました。本当にありがとうございました。

息子の充電期間も終わり、定例会に行くことも少なくなりましたが、いつまでも不登校に悩む親子の居場所として、活動し続けてください。



向日市ヲサン田 稲刈り後

子どものしていることで
無駄なことは何ひとつもない

F.M

「大地」が開催する、不登校フォーラム Vol.2 に参加して不登校の親の会が向日市にあるのを知りました。フォーラムでは不登校の体験者とその家族がスピーカーとしてお話をされていました。皆さんの話を聞き、同じように悩んでいる人がいる事をとても身近に感じて「大地」の定例会への参加を決めました。

その時、息子は中学２年生。中学１年生後半、体調不良の行き渋りから始まり不登校。２年生になり五月雨登校になりましたが、運動会後にまた不登校になりました。息子がこのまま学校に行かなくてもいいのだろうか？学校に行けるようになるにはどうすればいいのか？勉強を全くしないでゲームばかりで大丈夫なのか？昼夜逆転の生活で身体に良くないのではないのか？そして高校へ進学出来るのだろうか？いろいろな不安でいっぱいでした。その不安から子どもと衝突する事もありました。

定例会ではたくさんの話を聞き、またたくさん話を聞いてもらいました。そして、ありのままの子どもを認める事の大切さや居場所の大切さを知りました。中学生で反抗期の子どもを親の力で動かそうと考える事が無駄なのだと思いました。「大地」で「子どものしている事で無駄な事は、何ひとつもない。全てが未来へと繋がっている」この言葉を聞いて息子が自分の意志で動き出すのを待ってみようと考えるようになりました。

でも、いつ動き出すのかわからない期間を待つ事は思った以上に大変で、本当にこれで良いのか？不安になる時もありました。そんな時「大地」で話をして自分の気持ちを共感して認めてもらう事で不安は小さくなっていきました。

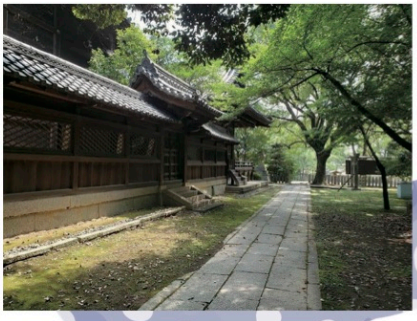
中学３年生になった息子は、学校にはほとんど行きませんでしたが修学旅行と卒業式は自分の意志で出席しました。そして通信制の高校を自分で選びました。今は、高校生になり週に２回ほど高校に通学しています。不登校という不安定な子どもの心を支えるには親の心が安定することも大切なのだと「大地」のみなさんに教えてもらいました。

定例会で元気に

上野 志保子

共働きで忙しく過ごす娘夫婦に代わって孫の世話をすることが、私の役割になって 17 年がたちました。4 人の孫のうち 2 人が不登校になりました。わたしなりの不登校への思いから、「※登校刺激はしない」「子どものあるがままを受け入れる」と心に決めて接してきましたが、具体的に細かいことになるとどうしたらよいのか迷うことがありました。そんな時、「大地」の定例会でのお母さん方のお話を聞いて、腑に落ちることがたくさんあり、定例会の後にはもやもやした気持ちも晴れて、あくる日からまた孫と明るく接することができましたし、不登校をしていても孫が確実に成長していることに確信が持てました。一方、娘夫婦は子どもたちと接する時間が短いせいか「いつまでたっても学校には行かない」「生活が昼夜逆転している」など、子どもの姿を否定的に見て心配することがよくありました。そんな時、定例会で話題になったことを紹介したり、お母さんたちが発行している「そのままでええねん」を読んでもらったりしました。今では、娘夫婦と私とで、落ち着いて孫たちを見守れるようになってきて、ほっとしています。

※ 登校刺激 …… 学校に行くよう促したり、登校させるさせるために学校に関わる話題を出すこと。「家庭訪問をする」「電話をかける」「プリントを渡す」など、児童生徒に学校を連想させるものも含まれる。



向日神社

自分の存在が認められるということ

上野 志保子

「手作り麺でラーメンを作りました。麺は頑張ってみんなでこねて作りました。スープは何時間もとりの骨をしっかりにこんで作りました。みんなおいしいと言って食べてくれました。」

これは、不登校中の孫Mが、ある新聞の読者欄に投稿して掲載された文です。Mは、不登校になってから、ほとんど家で過ごしていますが、週２回、来迎寺で開放してくださっている居場所には喜んで参加しています。そこで、家にいるときには手打ち麺を作ったりしていると話したところ、ご住職夫人が、Mがみんなに教えてあげて、みんなでラーメン作りをしてはどうかと提案してくださり、実現したのです。このことがうれしかったのでしょう。Mは自分の近況報告を新聞に投稿しました。学校に行っていなくても、人とつながって自分の存在が認められるという経験を経て、子どもは成長していくのでしょうね。中学時代は不登校をしていて今は大学生になった孫も、自分を認めてくれる居場所がありました。娘夫婦も、まだ学校には気持ちが向かないMの姿に、不安になりながらも、今のMの成長を喜んでいます。

向日市寺戸 来迎寺 地蔵盆

頑張りすぎている
自分を癒してあげて

K.M

『大地』が立ち上がってすぐに私に声がかかりました。その頃すでに長男、長女の行き渋りからの不登校歴は長く、その後次男も続くんですが。子どもも私も同じ一年過ごすなら楽しく過ごさないとという考えに至っていました。私からは登校を求めず、担任とは連携を取りながら出来る限り手助けし (やりすぎた事もあったけど) 登校は子ども自身に任せる事にしました。そうしたことで一旦は落ち込む子どもでしたが、元気を取り戻すのが早かった様に思います。また同時に私も仕事や趣味を始めたり生活を楽しむようにしました。上２人では親子でかなり苦戦しましたが、次男の場合、「学校行きたくない」をすんなり認めてあげたことでホントに元気な不登校生活を送れています。現在も進行形です。親子で不登校生活を楽しみ、おしゃべりし、皆と同じでない道を選んだことで、将来的にも自身で考え行動し選択していくことを、今から学ぶ良い機会となっていると思います。

今このような私たち親子があるのはさまざまな出会いのおかげです。幼少の頃よりそのまんまを受け入れてくれた『親子リズム』からの『おまつりクラブ』『わんぱくクラブ』、その先の繋がり『森のアトリエ』からの『はれザウルス』、そして『大地』の仲間たちが私たち親子の大きな支えになっていることは間違いないです。

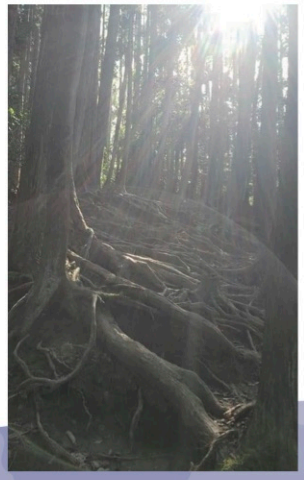
大地の定例会でかつての私のようにしんどい思いのお母さんが多くいると知り、過去の経験から母も子どももそのまんまを受け入れ、母は子から心も体も少し離れて、真面目で頑張りすぎの自身を癒してあげてほしいなと思いました。また【不登校新聞】に「お母さんも楽しんでと言われても楽しみ方がわからなかった」って見出しを見つけて、ならば、私の得意分野の楽しみをお裾分けしましょうと、勝手にですが、『大地』の〔遊び担当〕を引き受けました。お母さんたちはもちろん、子どもたちも巻きこんで、バーベキューや竹林から竹を切り出して流し素麺をしたり、仲間を集めてウクレレの会を作ったり、お寺の子どもたちと合同でピクニックに行ったり、できる範囲で沢山巻き込みながら楽しんでます。私自身も渦中ですが、しんどいお母さんたちの力になれたらなーって思っています。子どもたちは素直な天使。今の小・中学校に合わせる必要はないよね！

共感してもらうことはとても大事

I.M

大地には、娘のＫが中１の時から参加するようになった。Ｋが小６の秋から学校に行かなくなって、楽しいだろうと無理矢理旅行に連れて行ったり、勉強に取り組ませてみたりしたが、Ｋに何の変化もなくただ空回りしているなと感じていた頃だった。しんどそうな娘に何もしてやれない、ただ身の回りの世話をして一緒に暮らしているだけ、生きているだけの毎日だった。そんな日々をなんとか過ごせてきたのは、大地で話ができたおかげだ。共感してもらうことはとても大事だった。

去年から、Ｋは私と少しずつ外出をするようになった。ビデオを借りに行き、アニメのグッズを買いに行きたがるようになった。歯列矯正で歯医者にも通っており、中３になってからは、適応指導教室に週１回私と行っている。行けないこともよくあり、私もそんな時は休んだ方が良いと思えるようになった。今も周りを見ると不安が押し寄せてくるので、先のことは考えすぎず、一日一日を家族で楽しく過ごしたいと思っている。



鞍馬寺 木の根道

ある日過去の思いが消化

O.M

『大地』に参加してみなさんのお話を聞き、自分の思いを言葉にして話すうち少しずつ気持ちを整えることができるようになりました。そして同時に学びの場にもなり、様々な気づきがありました。また多方面の方々とつながりができ、子どもたちとイベントに参加しお手伝いさせていただく機会に恵まれました。このような仲間と過ごす時間は私にとって有意義なものとなっています。たくさんの方に支えられ今があることに感謝しています。

長い目でみた時にしんどい時期もあるけれど、一日一日を淡々と過ごしていくうちに進む方向がみえてくるように思います。自分の人生を引き受ける日々の中で、ある日過去の思いが消化されることがあり、あとは必要な変化が自然と起こってくるのであろうと感じます。

縁あって福祉に関わるようになりました。福祉とつながりをもてたことは心強くありがたく思います。今後私自身を大切に、心しなやかに自分のできることをゆっくりと進めていきたい。そしてこれからも小さな幸せを積み重ねていきたい。

大文字山からの京都市内

保護者にとって安心できる場

MORI

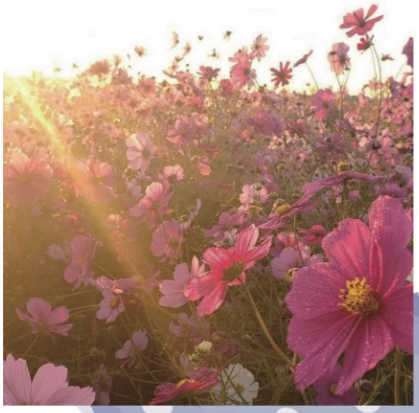
大地に参加のきっかけは公共の施設においてあった議会報告を読んだことがきっかけでした。もう私の子どもは義務教育を終えて、適応指導教室に行くことは無い年齢になっていましたが、その時感じていたことを伝えたいと思いました。息子が通っていたころは、週に数日で午前のみの開所だったと思います。

ここにいけば学校に行けるようになると思っていましたが、そんなに簡単なものではありませんでした。でも行き場のない、行き場が欲しいと思っているかもしれない子どもたちのために、常に行ける場所があればと願っていました。

あの頃、同級生のお母さんと話をしていてもいつも疎外感を感じていました。学校の話には参加できません。だからその場が保護者にとってもいつでも相談できる、そして安心できる場のひとつであってほしいとも思っています。

子どもが学校に行けなかった時の気持ちをずっと抱えたまま過ごしていました。大地に出会い、あの頃の苦しい気持ちを話すことで気持ちを整理することができました。

自分の夢を叶えるため前を向いて少しずつ進んでいる息子を信じ、見守っていこうと思います。



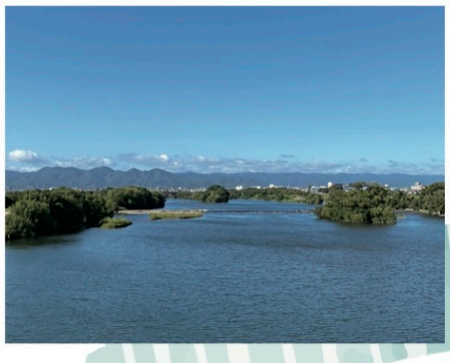
長岡京市今里のコスモス

すべてが私の学びで
自分を生きるための体験

Y.G

学校のシステムに合わず、行かないを選択して過ごしてきた毎日。どの場面でも多くの人が手を差し伸べてくれた。関わる仲間の中で育つ息子は、いろんな気づきを与えてくれました。 息子が思春期に入るころ、私が話を聴こうとしても聴いてあげれていなかったことで揉めることもありました。そんな時、安心して過ごせる仲間や居場所があればと思っていたら、友人である代 表と久しぶりの再会。高垣先生の講演会に誘ってもらい、子どもの今を受け止める、自分は自分であって大丈夫、というお話が心に響いたのが記憶に残っている。不登校で悩んでいる方々が安心して話せる場があるといいなぁ、という思いから代表のお陰で大地は設立しました。定例会では、揺れつ戻りつ思春期の息子との関わりを大地の仲間や、アドバイザーが受け止めつつ、たくさんのヒントやアドバイス、情報を頂きました。また、大地での活動を仲間と共にすることで、 子どもたちと関わり、たくさんの笑顔、喜びを体験しました。そして、子どもたちの居場所である来迎寺さんは、時々イベントに参加する息子を温かく迎えてくれる、また共に寄り添う母たちの居場所にもなり、私自身も元気をもらえる。全てが私の学びで自分を生きるための体験なんだと思う。

そんな中、私と息子はそれぞれの道を歩き出している。親子ですが時には友達のように、またきょうだいかのように過ごしてきた彼が、ゆっくりと自立に向かって進む道を考える今、いつも大切に思いながら信じて見守りたい。そして、私自身をそのまんま受け入れて次に進みたい。手を差し伸べてくださった皆様にここでありがとうを伝えたい。



桂川

支援者の声

乙訓不登校を考える親の会『大地』5 周年を迎えて

大地の子どもたち、若者お父さんお母さん 5 周年おめでとうございます。

大地が乙訓地域の不登校や行きづらさを抱えた子どもたちや若者たちの居場所として、また親たちの支え合いの場としての役割を果たして、5 年の歳月を重ねてこられたことに心より敬意を表します。

このコロナ禍においても、定例会を開催し参加者一人ひとりを尊重した運営を大切にされ、また講演会や親睦会などの取り組みも広がり、大地はしっかりと乙訓の地に根を下ろしていると感じています。

昨年は「全国のつどい」を京都で開催しようと大地の皆さんも事務局として府下と全国の仲間と一緒に準備をしましたが、残念ながらコロナ感染拡大により中止となりました。

最後に、大地がよりゆったりと温かく子どもたちを包み、親の支え合いの砦でありますように。

登校拒否・不登校を考える京都連絡会

前田 五郎

乙訓不登校を考える親の会『大地』5 周年にあたって

長岡京市で不登校支援を始めて、何人かのお子様やお母さま方と幸せな時を紡いできました。支援してきたというより、共に道を探って来たという感じです。

始めは塾に厭々連れてこられた子どもも、何回か面談を重ねると、家族には言えない苦しみを、声をつまらせながら吐露します。一日中、暗い部屋でゲームに没頭している子どもは、罪悪感に苦しんでいました。また、野球やテニスが得意で頑張っていたら褒められるのに、ゲームは何故認めてもらえないのかと私に問いかけてきます。彼らが「マインクラフト」で創る建物の素晴らしさに圧倒され、不登校だからこそ獲得した「プログラミング」のスキル。様々な発達特性があるゆえ、学校という環境には馴染まなかったとも思います。

この子達に私がしてきたことは、「途切れることのない学習支援」です。学校に合わせない形での学び。私の塾で学んだ子達が今はロボットの研究をしていたり、大学に入学して自分の得意な分野での学びを進めているという近況を聞く度に心の中で小さな拍手をしています。

でも、今でも夜中に来る長いライン。「助けて下さい。くるしいです。」そんな子達や親御さんと共にこれからも歩んで行きたいと願っています。

支援塾 「コスモス」
米澤　るみ

学校を相対化する

１９７０年代後半から８０年代の前半にかけての校内暴力期の非行問題を抱えた少年たちは、受験体制化した制度としての学校を拒否し、仲間のいる学校に登校してきました。しかし、制度としての学校が、彼らを抑圧し排除する力が高まるにつれ、彼らの世界は地下組織化され、制度としての学校、教師と鋭く対立しはじめました。彼らは「学校の中が一番安全なんじゃ！」といいました。彼らも、仲間と「保護」を求めて学校に来ていたのです。

今日、学校は新自由主義的統治の場と化しています。すなわち、学校は、学校の求める価値をすすんで受け入れる者のみが包摂され、受け入れられない者は自己責任として排除される場になっています。９０年代の少年による重大事件を機に、学警連携の強化、教育基本法改正、少年法の改正を背景に先の学校の変化が進みました。

その結果、２０１０年以降、不登校の急増状況は今も続いています。「そんなことでは、社会に出たらやっていけないぞ」こんな教師の言葉に象徴される学校を拒否し、家庭内に身を置く不登校生徒、家庭内に居場所のない少年たちは、可視化されていないアンダーグラウンドにさまよっています。

子どもたちにとって、学校を絶対化せず「学校は行けたらいいけど、行けなくてもいいよ」と寄り添う大人が必要です。そして、私たちは、「不登校問題」は、日本の社会・政治・学校の問題として向き合うことが大事だと思います。

乙訓少年支援の会「ひまわり」
藤木祥史

乙訓不登校を考える親の会『大地』5 周年にあたって

『大地』の歩みは、不登校の問題に対して「あきらめ」ではなく、子どもたちを中心に会員の皆様や支援者の皆様が自分たちのこととして受け止め、子どもたちの未来のために取り組んだ「挑戦」であったように思います。

親同士が悩みを共有して、子どもに向き合える場を作ったり、子どもたちの居場所づくりに取り組んだり、子ども自身のつらい思いを聞く場を設けたり、様々な努力が実を結び、子どもたちの「生きる希望」を育んできたように思います。

社会福祉協議会〈地域福祉〉との関わりでは、「社協まつり」の交流コーナーのご協力、地域の事業所や団体と取り組む「東向日いきいきまつり」へのご参加のほか、乙訓青年会議所が地域づくりの一環で開催される「乙訓ドリームフェスタ」への出店などにご尽力いただきました。

こうした活動を通して子どもたちと関わり、学校に行けない姿ではなく、地域のために頑張ろうとする姿を目にしてきました。率先して地域との交流を図ろうと頑張る子ども、その子を応援するために協力する仲間、ご家族、地域の皆様の姿がありました。不登校の子どもたちは一人ひとりには生きる力があり、その力を発揮できる地域社会の輪が広がればよいと思います。それは制度や施策だけではなく、乙訓不登校を考える親の会『大地』のような活動により実現するものだと思います。

最後になりますが１０年１５年とこの活動が続きますことを心より祈念いたします。

向日市社会福祉協議会
事務局次長兼地域福祉課長
木下博史

”学校ではない居場所”で子どもをサポート

大地の設立５周年、お祝い申し上げます。
こどもたちの成長過程で困りやつまずきが生じたときに、親や子が孤立してしまうことがないよう、こうしたつながりを維持されていることは、本当に貴重なことだと思います。
発達のペースが人と違ったり、なんらかの特性を抱えていたりするこどもたちにとって、現在の学校という環境は負荷がかかりがちです。

その中で、こどもたちが不登校という選択をおこなったときに、単なる学校からの離脱が、社会からのドロップアウトに直結してしまいかねないのが日本の現状です。

私たちヴィキッズは、「福祉」というカテゴリーの事業者のため、受け入れられるこどもたちに一定の制限はあるものの、発達に課題を抱えたこどもたちの、学校以外の※オルタナティブな居場所となれることを目指しています。

今後も、大地のような親の会や、家庭、学校、地域社会と連携しながら、こどもたちが社会との接点を維持し、豊かなこども期を過ごせるよう、児童福祉施設として可能な限りお子さんたちのサポートをおこなっていきたいと思います。

児童発達支援・放課後等デイサービス ヴィキッズ

岡田 耕輔

※ オルタナティブ … alternative 代わりの手段、選択肢

『大地』5周年によせて
～小さな寺子屋から共に小さな一歩を～

小さなお寺ですが、誰でもが利用できて心安らげる場所をという思いから「釈迦 fe」を設けました。「釈迦 fe」という空間で「来迎寺 寺子屋」として向日市の委託を受け学習支援を行うようになりました。

ほぼ同時期から不登校の子ども達の居場所としての活動も始まりました。私は不登校の子どもを持つ母親です。子どもが不登校になった時、どうしたら良いのか、とても悩みました。何としてでも学校に戻さなければと焦り、相談することもできず辛い毎日でした。そんな暗闇の真っ只中でしたが、不登校の子ども達やお母さん達に寄り添えるような活動をやっていきたいと思いました。

子ども達の居場所として 2018 年、3 名の子ども達から始まりました。大学生や大学院生のスタッフの方との関りも大きな力となって、今では 10 名ほどの子ども達が利用してくれています。居心地の良い環境と、子ども達の自己決定を大切にし、子ども達のやりたい事や、興味のある事にはできる限りサポートしながら、一緒に楽しむという事を大切にしています。子ども達の希望で土曜日の開設も始まり月曜日、土曜日の週 2 回開設しています。

人の痛みがわかる優しい子ども達です。しんどい事もたくさんあるでしょうが自分らしく成長してくれたらと願います。

「大地」を通してお母さま達がつながり合い悩みなどを共有し力に変えて行かれる。本当にいいなあといつも感じています。これからも、たくさんの子ども達やお母さま達と様々な形でつながっていきたいと願っております。

寺戸 来迎寺　寺子屋
福井ともみ

親子でつくった　たけのこひろば

大地５周年おめでとうございます。私が大地と関わるようになったのは、長岡京市で参加していた「子どもと共に育つ親の会フェリーチェ」のアドバイザーの先生の紹介でした。

子どもが小学校３年生（2016 年）の時に不登校になり、フェリーチェの先生の塾や居場所に通ったりしながら過ごしていたのですが、4 年生の６月から向日市の適応指導教室に通い始めました。当時はわが子を含めて毎日通っている子は３人で、水曜日から金曜日の午前の３時間、楽しんで通うようになりました。笑顔が戻りホッとしたのを覚えています。適応指導教室では、保護者が知り合う機会は無かったのですが、繋がりを作りたいと思い、新しい方が来られたら、連絡先を渡し、わが子が通っていた頃にも 10 人程の親子と少しづつ交流の輪が広がっていきました。初めて話した方が大地の会員さんでもありました。少し通ったけれど今は通っていないとか、卒業して新しい道を歩んでおられる方などとも、今も時々ゆるーくラインで連絡をとったりしています。どの親子も一歩一歩休みつつも歩んでおられる姿に励まされます。

さて、たけのこひろばの事ですが、適応指導教室で出会った最初の３人の子から、「適応指導教室の無い日が暇だ、毎日集まれたら良いのに」という声を聞きました。そこで、なぜ適応指導教室が週に３日しかないのか、月曜、火曜日も週５日通いたい、という事を市に話していこうという話と合わせて、集まる場所を作ろうという事になり、最初に通っていた親子３組で、どのくらい集まりたいか、どんな事をしたいか、会の名前など話し合い、2017 年 12 月に「たけのこひろば」がスタートしました。週１回公民館中心に、それぞれの子のやりたい事に取り組んできました。外出では、公園、山、スケート、センバツ観戦、競輪場、室内では、調理、ボードゲーム、お喋り、自学自習などなど、参加したい時に参加という形でした。別の曜日に誰でも参加できる卓球も市の施設に登録して始めました。

公民館は大人の見守りが必要でしたが、子ども達から親だと嫌だなと言われたり、喧嘩になる事もあったりして、知り合いの地元の大学生に、ボランティアで来て頂けないかお願いし、就職されるまで約１年関わってくださいました。また、「大地」を通して繋がりが出来た「来迎寺」さんの「釈迦 fe※」を 2018 年６月から居場所としてお借りできる事となり、そこで行なわれていた学習支援のボランティアの大学生、院生も関わってくださる事にもなりました。親以外の方との関わりは本当にありがたく、しんどい思いを抱えている子ども達に、寄り添い優しく明るく関わってくださる姿には学ぶ事が多いです。また、市の議員さん達が見学に来られて、適応指導教室の拡充を議会でとり上げてくださって、月曜日から金曜日まで通えるようになったり、放課後等デイサービスに通うことができる子は、そこでの出席が学校での出席日数として認められたり、市内に小学生の足でも通える場所が様々広がり、選べるようになってきた事は大変ありがたく嬉しい事でした。他にも向日市社協さんが地域の催しに参加させてくださったり、京都洛西ロータリークラブさんがミカン狩りへの招待、パソコンの寄付、設置など、「来迎寺」の福井さんと繋がった事で広がった地域の方の応援は心強い事でした。

運営費は、かかった分をそれぞれで負担していましたが、「大地」からも補助金を頂き、ボランティア交通費や遊び道具の充実に充てることが出来ました。また、様々な助成団体への申請も福井さんが中心に取り組んでくださっています。

わが子もですが、卒業する子も出て、私も毎週のように顔を出す事がなくなりました。今いる親子でまた、それぞれに好きな事に取り組んでいけたらよいのかなと思っています。現在（2021 年）は、福井さんが中心となって、新しい子も含めて、10 人ほどの子ども達が、くつろいですごされているそうです。

先日「一からつくるラーメン作りやるから、見に来ない？」と誘って頂き、久々に親子で訪ねました。事前に準備した麺の生地、鶏がらスープ、ネギ油などが並び、自分用の生地はそれぞれのこね方、切り方、湯がき具合で、バラエティに富み、時間はとってもかかるけれど、本当においしいラーメンが出来ていて感動しました。変わらず、熱くて温かい場所でした。

たけのこひろばで過ごした豊かな時間、出会った方々は、今でも私の宝物で、生きる力となっています。子ども達もそうであったら良いなと思っています。

支えてくださった皆様本当にありがとうございます。これからもよろしくお願い致します。

（M）

※ 釈迦 fe … 2018 年６月～地域に開かれた居場所としてスタート。その後、子どもたち（不登校の子含む）の居場所作りをしている。

大山崎町にも「教育支援センター」を

14 年前、子どもが中学校に行けなくなり、夫も私もその状況を受け止められず、混乱した状態でした。教師とは、どうすれば子どもが学校に行けるかばかりを話し合っていました。今考えると、子どもの気持ちに寄り添わず、逆の対応をしていたと思います。学校から勧められ心療内科を受診したり、スクールカウンセラーと面談したりしたけれども、光は見えませんでした。

そんな中、参加した学童保育の研修で、「第 13 回登校拒否・不登校問題 全国のつどい in 京都」のビラを受け取り、藁をもつかむ思いで参加しました。たくさんの当事者や親、教師が参加されていて、参加者全員が安心して思いを語れる場でした。誰も責められず、受容され、何より自分ひとりではない、と感じられる初めての経験でした。親だけでなく教師も多く参加されており、不登校を理解しようとされている姿に感銘をうけました。

その後、新しく来られたスクールカウンセラーと定期面談が始まり、共に状況を整理して考えられるようになりました。担当者が変わっただけではなく、「全国のつどい」に参加したことで、私の不登校への見方が変わったからだと思います。子どもは学校に行けなくても、週 2 回の塾と、所属していた野球チームに毎週末休まず出席していました。学校に行けなくても、それで十分だったのです。今は心からそう思えるけれど、当時はそこまで思えなかった自分がいました。

さて話は変わって、我が子を理解したいと願い、不登校について学び始めた私は、長岡京市では、既に 1993 年に適応指導教室が始まっており、2005 年には教育支援センター事業が開始されている事を知りました。また、向日市にも適応指導教室が週 3 日だが設置されていることを知りました。大山崎町にもあったら、子どもの居場所になっていたかもしれない、と思いました。大山崎町の教育委員会に確認すると、「適応教室を作ってほしい」「長岡京市の適応指導教室に通わせてほしい」という声が、以前から学校や教育委員会に寄せられていたことがわかりました。しかし、「他の自治体の適応指導教室には通えない」「大山崎町での実現は予算面もあり難しい」と返答していたとのことでした。

私は、長岡京市の教育センターを見学し、事業の概要について説明を受け、大山崎町にも設置したいと強く思いました。大山崎町で不登校の子を持つ親達に呼びかけ、案を練って当時の町長、教育長宛に要望書を提出しました (下記参照)。議会で取り上げられ、2016年成立した『教育の機会の確保に関する法律』の後押しもあり、大山崎町に 2018 年 6 月から教育支援センター (適応指導教室) が開設されることになりました。しかし、教室は 1 部屋しかなく、週 3 日午前中のみの開設で、改善の必要があると考えています。今後は、近隣の実績に学び、子どもにとって安心できる居場所としての教育支援センター (適応指導教室) になるよう願っています。

「全国のつどい」で当事者の仲間が大切と気づいた私は、4 年前から「大地」に参加しています。参加者みんなが、安心して思いを語れる貴重な居場所となっています。

（栗山 千雅子）

教育支援センター (適応指導教室) 設置のお願い　【抜粋】

1. 当事者 (本人・保護者) の教育相談やプレイセラピーなと、個別の状況に応じて、当事者の意思を尊重しながら、センターでの教育相談体制を組んでいく。
2. 担任の先生と日常的な連携を大切にしながら、情報交換等の担任会を定期的に設定する。
3. 保護者同士の交流の場として保護者会を開催する。
4. 教室では、児童生徒が、教育指導員や友達と活動時間を共有することで「この教室は楽しい」「自分の気持ちを理解してくれる」「また教室に来よう」という気持ちになれるような指導・援助内容にする。具体的には、本人にあった教科の学習、実技実習 (調理・図画工作など)、軽いスポーツ、文化体験学習・スポーツ体験学習・野外体験学習・社会体験学習、友達との話し合い、個別面談など。
5. 不登校以外の教育相談も気軽にできるよう広報していき、当事者の悩みに早期対応できる機関にする。
6. 以上のような内容を保障するため、相談援助、教育支援に関わる専門性を有する指導者を配置する。

現在、大山崎町には、不登校児童生徒が学ぶ場 (適応指導教室) がなく、近隣の自治体の適応指導教室に通うことはできません。学ぶ場、居場所としての教育支援センター (適応指導教室) の早期実現をお願いします。また、当事者との懇談の場の設定も併せてお願いします。